

## 63. 看護と心理の協働による参加型教育を、 地域の子育て支援者に実施した成果と今後の課題

賀村悦子<sup>1)</sup>、長谷川真弓<sup>2)</sup>、調優子<sup>3)</sup>、森中恵子<sup>4)</sup>、庄司博子<sup>4)</sup>、馬場みちえ<sup>5)</sup>

大野城市役所こども部こども健康課保健師<sup>1)</sup>、あかね助産院長<sup>2)</sup>、九州大学こころとそだちの相談室臨床心理士<sup>3)</sup>、福岡大学大学院人文科学研究科<sup>4)</sup>、福岡大学医学部看護学科<sup>5)</sup>

### はじめに

全国の児童相談所に対応した児童虐待相談対応件数（厚生労働省速報値）は、平成 20 年度は 42,662 件と平成 12 年度の 17,725 件の約 2.4 倍と増加している。平成 17 年度に改正された児童虐待防止法では、発見から支援にいたるすべての段階において市町村の役割が示され、児童相談所等との関係機関と連携しながら様々な対応を求められている。

大野城市では、要保護対策地域協議会ができるまで、こどもの虐待問題に対応するために、「すこやかエンゼルサポート事業会議」と題して、平成 15 年度から平成 20 年まで 48 回の研修会議を行ってきた。また平成 17 年度からは、「サインズオブセーフティアプローチ法」(以下 SoSA と表す。)を用いて、こどもの虐待事例応を検討してきた。この会議は、事例検討を中心にした参加型の会議であったが、その参加者は、医師や保健師、助産師などの専門職が大半であった。専門職を中心にした会議の中で、SoSA を用いた事例検討は 25 件あり、参加者はその手法を用いて事例の理解や支援者としての資質を深めていくことができた。しかし、専門職を中心にした研修の充実を図ってきたものの本市における虐待に関する相談は、年々増加傾向であり、事例も複雑で多様化している。

今回、保健福祉研究をするにあたり、「すこやかエンゼルサポート事業会議」の参加者以外にも対象者を広げ、地域看護と臨床心理士の専門の先生方に協力していただき、看護と心理の協働による支援者教育を、SoSA を用いた最終事例検討を行うことも目標に育児サポーター研修として参加型研修を 5 回実施した。この研修内容の成果と今後の課題を、母子保健の立場でここに報告する。

### 研修対象者と内容について

#### 1. 研修対象者

女性 16 名：看護職・福祉職 8 名、地域子育て支援者（非専門職）8 名

#### 2. 研修期間

平成 21 年 7 月 10 日～平成 21 年 9 月 8 日

#### 3. 研修内容（表 1）

表1 育児サポーター研修内容

	日 時	内 容	講 師
第1回	7/10 13:30～16:00	* 母子保健の現状、育児サポーターとは？グループワークによる事例検討（図1）	福岡大学看護チーム 馬場准教授他
第2回	7/23 13:30～16:00	* 前回の事例検討 の振り返り 赤ちゃんの成長発達、育児について ** 自分を知り、傾聴法についての学びと実践	福岡大学看護チーム、 九州大学こころとそだちの相談室 調臨床心理士他
第3回	8/11 13:30～16:00	* 前回の振り返り 赤ちゃんの成長発達、育児について ** ソリューション・フォーカスト・アプローチの学びと実践	福岡大学看護チーム、 九州大学こころとそだちの相談室 臨床心理士他
第4回	8/27 9:00～12:00	すこやか育児相談事業での実践(図2、図3)	福岡大学看護チーム 他
第5回	9/8 13:30～16:00	* まとめ ** サインズオブセーフティアプローチの学びと事例検討 を用いて、事例検討（図4、図5）	福岡大学看護チーム、 九州大学こころとそだちの相談室 臨床心理士他
事後面接	9/30 11:00～14:00	* 専門職と非専門職のグループに分けての面接	福岡大学看護チーム 他

\* 看護担当、\*\* 心理担当

#### 4. 研修の評価

研修者の参加状況について

研修対象者のアンケートを実施

5回の研修修了者に対して面接。研修を通しての学びについて確認。

#### 研究結果

1. 研修参加状況：研修参加者の平均年齢 45.06 歳（30 歳～60 歳）。参加者の条件は、子育て支援に意欲のある方とし詳細な設定は行わなかった。しかし、今回の研修参加者は全員既婚者で、妊娠中の2名を除き参加者自身も子育て経験者だった。5回のうち全て参加できた者は、16名中11名、研修参加者の平均参加回数は、4.37回だった。5回の研修会場は、大野城市すこやか交流プラザにて行い、事後面接は大野城市役所にて実施した。講師を含め、5回の研修に関わった支援スタッフは13名だった。



図 1



図 2



図 3



図 4



図 5

2. 研修の内容の評価について（表 2 参照）

表 2 5 回目の研修参加者アンケートより

1. 研修の内容は、いかがでしたか？（％）				
よかった	まあまあよかった	どちらでもない	あまりよくなかった	よくなかった
92.9	7.1	0	0	0
2. 研修の難易度は、いかがでしたか？（％）				
難しかった	難しかった	適切だった	やや易しかった	易しかった
14.3	28.6	57.1	0	0
3. 研修の回数は、いかがでしたか？（％）				
多かった	やや多かった	適切だった	やや少なかった	少なかった
0	14.3	85.7	0	0
4. 育児支援のイメージに、変化はありましたか？（％）				
変わった	どちらでもない	変わらない		
64.3	14.3	21.4		
5. 今後の活動に、いかせますか？（％）				
いかせる	まあいかせる	どちらでもない	あまりいかせない	いかせない
85.7	14.3	0	0	0

3. 対象者の学びについて（表3参照：アンケート自由記述欄一部抜粋）

表3 5回目の研修参加者アンケートより

	専門職（8名）	非専門職（8名）
内容について	参加型のよさ。毎回フィードバックがあった。看護と心理の協働研修をはじめてくれた。“人の話を聞く”基本的なことが、とても難しい。参加するごとに、昔の子育て中の気持ちや一生懸命な気持ちを、久しぶりに思い出した。傾聴を心がけ、4回目の研修で実際の親子の笑顔を見せてもらえ良かった。いろいろな方の意見が聞け、アプローチの方法を体験でき、良い経験になった。	自分自身が向上できた。この仲間研修を続けたい。今回で終了なんてザンネン！5回の研修が内容のあるものになったと感謝。少し自分が変わった気がした。今までこのような機会は、なかった。専門用語も頭の片すみに入れておきたい。自分自身が相談者・サポート役の体験学習ができよかった。
難易度について	コンプリメントやソリューションは、聞きなれないことばだった(看護職)。聞き方、話し方、初対面に対しての進め方&接し方、傾聴技術難しかった(福祉職)。充分理解でき楽しく参加できたと思う(看護職)。わかりやすかった(看護職)。	具体的でとてもわかりやすかった実習もあり体験できたことが良かった。専門知識がなくても、研修についていけた。難しいことばもあったが、理解しやすかった。 <u>相談内容の事例が、とても難しかった。</u>
回数について	徐々にいろいろな知識をえることができ、最終的にはいろいろな方法を体験できたのでよかった。育児相談の体験実習も含めて適切だったと思う。	絶対参加しないといけない回数としては、5回が適当。内容も充実していて、流れる的にもよかった。実習もあり、すべての研修が充実していた。
育児支援のイメージ	自分にできることが具体的になった。いろいろなタイプの参加者がいたので、勉強になった。問題意識だけ見るのではなく、肯定的な視点も重要と感じた。復習できた。	自分が何かやってあげなきゃというよりは、相手が何を求めているのかに目を向ける。恥ずかしがらずに失敗を恐れず、積極的に関わろうという気持ちになった。今の母親が理解できた。
プログラム全体に対して	参加型だったので初めは疲れたが、プログラムを通じ仲間意識が向上した。毎回テーマが違うので、いつの間にか楽しんで参加していた。今後の活動や日頃の人とのかかわりにも、役に立つとても良い企画だった。自分で考えかつ他の方たちとともに、話し合いができ、お互いが高めあうことができた。子育て中の母親として、自分の子育てを振り返りフィードバックできた。 <u>事例検討を、もう少し増やしても良いのでは。</u>	グループ討議がよかった。グループ討議が中心だったので、話が盛り上がった。ゲーム感覚のメニューもあり楽しかった。実習では習得したことを確認できて、よかったと思う。全5回、すべての内容が、すばらしかった。仕事の関係で、研修を受講できなかったのが残念。

## ．まとめ

研修の参加状況は、平均参加回数 4.37 回と高かった。研修初期は、参加型でかつ看護と心理の稀な協働研修にとまどいをもつ者もいたが、5 回の研修をとおして参加者同士の仲間意識もうまれ、楽しく終了できたとの回答者が大半だった(表 3)。研修対象者は、異なる職種や世代・背景の違いがあったものの、同じ目的に対する動機付けが明確で、内容に対して、ほぼ全員が参加してよかったと回答している(表 2)。また、初回からグループワークが多かった事が、自然な形でお互いの立場や役割を認識できる機会になり、対象者同士の交流ができやすかったのではないかと考える。

更に、動機づけや子育て支援に関心の高い参加者同士の交流に加え、看護・心理の立場を最大にいかした研修内容も、今回の大きな特徴だった。半日 5 回の研修については、85.7%の者が適切だったと回答しているが、研修内容の理解が充分に行えるように、研修の振り返りが毎行われていた。その事が、専門職・非専門職を問わず、聞き慣れない専門用語に対しても理解しやすい状況で受け入れられ、プロセスを踏んだ段階的な研修内容になっていたと考える(表 3)。

しかし、SoSA を用いた最終事例検討についての捉え方は、専門職・非専門職とも研修内容として効果があったと認めているが、事例検討に対する難易度や要求に違いがみられた(表 3)。いずれも、今後の地域活動の研修企画として参考にしていきたい。

## ．謝辞

本研究にご協力くださいました大野城市社会福祉協議会、NPO 法人チャイルドケアセンター大野城、研修参加者の皆様、大野城市役所こども部こども健康課の皆様方に深く感謝申し上げます。

## ．文献

- 1) Andrew Turnel. 白木孝二監訳 井上薫・直美訳．こどもの安全を求めてサインズオブセーフティアプローチ．金剛出版．2000

## ．会計報告

収入	研究助成金(50万円) + (銀行利息 128円)		500,128
支出	謝金	講師、事務補助に対する謝金	104,000
	研修費	学会参加費用、研修準備費用他	209,539
	旅費	講師旅費、打ち合わせに関する交通費他	37,490
	需用費：消耗品費	研修に関する紙、インクなどの事務用品他	69,888
	需用費：図書購入費	研修に関する図書購入費	75,201
	役務費	切手などの郵送料他	4,010
		計	500,128

\* 収入 500,128 円 - 支出 500,128 円 = 0 円